

RAM PRACTICE
ABOUT POST-DOCUMENTARY
〈DAY2: SCREENING EVENT〉

RAM2 TRAINEE -
MAYUMI ARAI, SOPHI ELSAMNI,
SHINTARO KAWAKAMI, NAO KIMURA,
MARINA KOMIYA, WATARU KOYAMA.

RAM2 FELLOW -
NATSUMI AOYAGI, YUKIKO IIOKA,
WOOMIN GEN, TOMOKO SATO.

GUEST ARTIST -
YU ARAKI, SHU ISAKA, OLTA,
DAISUKE KURODA, MIKU SATO,
ISHU HAN, AYA MOMOSE,
NAO YOSHIGAI.

RAM PRACTICE - ポストドキュメンタリーをめぐって
〈DAY2: SCREENING EVENT〉

参加作家 | 新井麻弓, エルサムニ・ソフィー, 川上伸太郎, 木村奈緒, 小宮麻吏奈, 小山 渉,
青柳菜摘, 飯岡幸子, 玄 宇民, 佐藤朋子, 荒木 悠, 伊阪 柊, オル太, 黒田大祐,
佐藤未来, 潘 逸舟, 百瀬 文, 吉開菜央 (五十音順)

日時 | 2019年2月16日 [土] 13:00-21:00 (開場12:30)

会場 | 渋谷ユーロライブ / 渋谷区円山町1-5 KINOHAUS

定員 | 178名

参加方法 | 予約不要 / 入場無料 (途中入場可)

問い合わせ (geidaiRAM2事務局) | TEL: 050-6870-1266 MAIL: geidairam@gmail.com

企画 | geidaiRAM2 (東京藝術大学大学院映像研究科)

主催 | 東京藝術大学大学院映像研究科

助成 | 平成30年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」

木村奈緒

#newsstand

2019 / 9 min



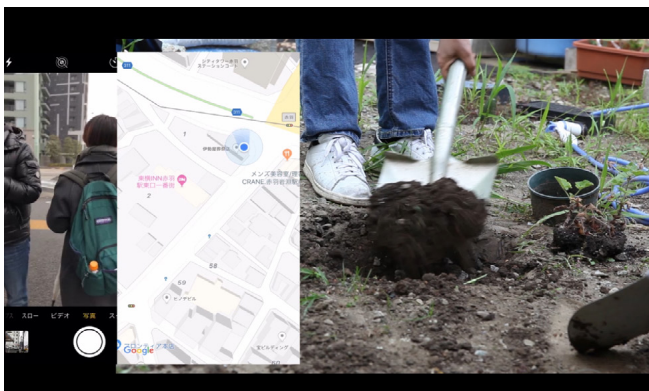
数年前から渋谷の街角にある個人売店（ニューススタンド）が気になっていた。林立する商業ビルの足元にぽつんと佇む売店は、お世辞にもキレイとは言えず、そこだけ時間が止まっているようだった。一方、渋谷の街は、2012年の渋谷ヒカリエ開業を皮切りに大規模開発が進み、2019年初頭の現在も訪れるたびに急激な変化を遂げている。変化できない風景と、変化を止められない風景を目の前にして、なぜだか私は居ても立ってもいられなくなった。50年後、100年後の渋谷がどんな街かは分からない。おそらくそこに私はいないだろう。でも、かつてこんな風景があって、そこに人が生きていたのだということを、見も知らない誰かに届けたい。

撮影・編集 = 木村奈緒

小宮麻吏奈

繁殖する庭 20190216

2019 / 17 min



「繁殖する庭」は、小宮麻吏奈と鈴木千尋の二人が再建築不可の土地に「家のない庭」を作るプロジェクト。

小宮麻吏奈 + 鈴木千尋

小山 涉

社会は夢の共同体 - みえないものを語る -

2018 / 18 min

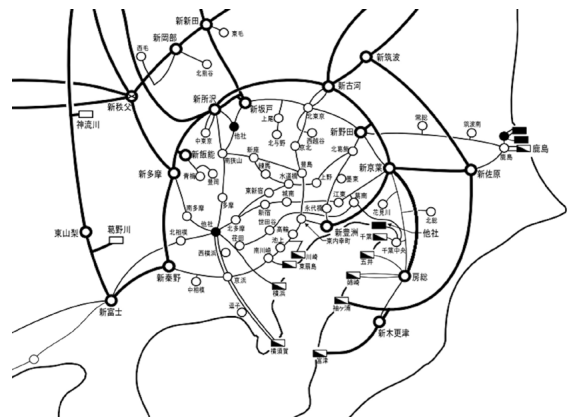


精神の病を患う方を対象に「今までにみえないものについて経験したこと」を語ってもらう。そして話の内容から浮かび上がるイメージをもとに、作家と共に粘土に形を与えていく。幻覚、幻聴、妄想などは他者に対してわからないものとして受け止められがちのように思う。しかし、絶対的に共有することが出来ないものであったとしても、共有し考えをすり合わせる中でほんの僅かにお互い歩み寄ることは出来るかもしれない。ただ、本作では撮影の条件として肉声は取り除き、語る姿は映さず、個人は把握されないようにとの条件の中で行われたが、それはまだお互いに歩み寄るということの難しさをどこか私に感じさせた。

川上伸太郎

東京カミダーリ

2018- / 10 min / レクチャー・パフォーマンス



東京という都市を人間として考えるとき、東京はどう映るか。本作は、沖縄のユタという存在と、東京の都市メディアとの間に類似点を見つけ、東京の神経系である電線や変電所をたよりに、東京の精神や身体を検査するという実験的な取り組みである。東京という都市に私たちは助けられるのか、もしくは幻覚妄想錯乱トランス状態にされているのか。東京はユタになれるか、カミダーリ状態のままか。現在、診療中である。

患者 = 東京 担当医 = 川上伸太郎

エルサムニ・ソフィー

Keiko and Ibrahim

2019 / 5 min

05



自身の存在について問われる際に幾度となく語ってきた物語を、沖縄・カイロ・東京の断片たちと、家族アルバムの古い写真から、今もう一度立ち上げる。

出演 = Keiko Elsamni / Ibrahim Elsamni

新井麻弓

Swiss Step Aerobics ~

The gift exercise / Invitation 4.2: Sakadang / Datong
~ 半身ワルツ

2018・2018・2015 / 計 12 min

06



3つのプロジェクトのダイジェスト映像等。スイス、台湾・太魯閣国立公園、ウィーンそれぞれの土地でのフィールドワークを通して、「大きな物語」ととらわれないための個の複数性を考察する。

"Swiss Step Aerobics"

助成 = バーゼル州政府 / Ernst Göhner Stiftung © Willmann / Arai

"The gift exercise / Invitation 4.2: Sakadang / Datong"

助成 = 森人 Tree Tree Tree Person Taroko Arts Residency Project / 台北市政府文化局

© Willmann / Arai

"半身ワルツ"

© Mayumi Arai & Masumi Inoue

オル太

スタンドプレー vol.1

2018 / 29 min

07



本公演は、2018年7月に川崎能楽堂にて上演されました。「スタンドプレー」は、オル太が日常の中から笑いを生む事物や状況を記述、記録し、都市の機能やメディアと身体が作り出す関係性を考察する試みです。都市におけるパイロンやペットボトルなどの簡易的に用いられる物、賭け事などの集団における行為、信号機や防災無線などの機能やそれらの環境での人々の身振り与会話に着目し、足袋を履いた演者が笑いがもたらす社会的な役目を演じています。

© 2018. OLTA

オル太

スタンドプレー vol.2

2018 / 20 min

08



パフォーマンスの公演は、2018年10月にポーランド、ヴロツワフの BWA Awangarda にて上演されました。3名のパフォーマーが、都市を人型に表したオブジェや神話を象徴する仮面を用いながら、モニターの映像に呼応して身振りの模倣が行われます。モニターの映像では、近代オリンピックの歴史を新聞に掲載された写真や風刺画から参照に、競技場や競馬場などの都市スタジアムでの行為が古来から継続される人類の営みとして撮影されています。

© 2018. OLTA

佐藤朋子

103 系統のケンタウロス

2019 / 15 min



この映像は、2019 年 1 月に黄金町で発表したオーディオツアー型の作品《103 系統のケンタウロス》を映像版として再構成したものである。《103 系統のケンタウロス》では鑑賞者が実際に横浜市営バスに乗り、横浜市内にある旧根岸競馬場第一等観覧席を訪れる。鑑賞者は乗車中に、旧根岸競馬場にまつわる語りをオーディオプレイヤーで視聴しながら、手元の冊子に掲載された画像を参照する。

GUEST ARTIST

佐藤未来

Retelling Yokohama

2019 / 9 min



アメリカ軍兵士相手の娼婦として働く

第二次世界大戦後、GHQ の占領時、米軍と横浜の娼婦の間に生まれた混血の赤ちゃん GI ベイビー。貧困と差別により、多くの娼婦たちは産んで間もない赤ちゃんを捨てた。900 体以上の赤ちゃんが根岸外国人墓地に埋められた。語られない存在とその物語は眠り、いま消えようとしている。GI ベイビーとして生まれ、生き延び、バンド GOLDEN CUPS など活躍するミュージシャンのルイズルイス加部とその娘：真麻をとらえ、横浜の隠された側面、戦争の周辺を描こうと試みた。1946 年の星条旗新聞に、米軍相手の娼婦のほとんどが 30 代以上だと書かれた記事を見つけた。現在 30 代となった真麻に、娼婦だった彼女の祖母を重ね、現在と過去の横浜を同時に語り直す。

出演 = 武田真麻 / ルイズルイス加部 / ジョン・ラドウィグ / カルビン・バーチフィール (声)
撮影 = 佐藤未来 / 三上 亮 編集 = 佐藤未来 協力 = 武田喜顕 / 李和晋

黒田大祐

ハイパーゴースト・スカルプチャー
- 伊藤博文, マッカーサー, 蒋介石, マルクス, 孫文, 金日成

2018 / 14 min



1930 年代の東京芸大彫刻科へ学びに来ていた留学生が東アジア諸国に拡めた「彫刻」概念についてのリサーチをベースに制作した作品。オーギュスト・ロダンが制作した「地獄の門」という彫刻があるが、近代の彫刻家たちは自らその地獄の門をくぐり、ロダンの言葉をバイブルに彫刻を作り続けた。「彫刻とは何か」本作は、この地獄のカルマを背負った彫刻家の物語であり、鳥の姿になってまで彫刻を作り続ける幽霊たちの哀れで恐ろしい呪いの彫刻地獄譚である。

GUEST ARTIST

伊阪 柊

Sprout

2018 / 22 min



1980 年に噴火したセントヘレンズ山と周辺都市の関係を追う映像作品。

構想・撮影・3DCG 制作・編集・音楽制作・小道具デザイン = 伊阪 柊

潘 逸舟

ミュージカル・チェアズ

2015 / 10 min

13



《Musical Chairs》は2つの映像から構成されています。1つ目は5人の人々が干潮で海から現れた無人島で椅子取りゲームをするというパフォーマンス映像で、2つ目はその無人島が満潮でゆっくりと海の中に姿が消えていく映像です。展示では2つの映像が表裏の背中合わせでプロジェクションされています。

© Ishu Han

百瀬 文

聞こえない木下さんに聞いた
いくつかのこと

2013 / 26 min

14



耳の聞こえない人が「聾者」と呼ばれるのに対し、耳の聞こえる人は「聴者」と呼ばれるそうです。

この映像は、聾者である木下さんと聴者である私とで行った「声」をめぐる対談を再演し、記録したものです。

© AYA MOMOSE 2013

吉開菜央

風にのるはなし

2017 / 9 min

15



神奈川県真鶴町は、高度経済成長期の勢いに乗って高層マンションや商業施設を建てることを頑なに拒み、自然と調和するまちづくりを地道に進めてきた。そのルールは「美の基準」と呼ばれ、町の人々が自分の家から海を見渡せるよう建築物の高さに制限があったり、実のなる木があると気持ちも晴れやかになるので、みんな積極的に家の周りに木を植えようなどという、当時の町長の思いやりと優しさで茶目っ気にあふれたものだった。そんな町の雰囲気はなんともどこかだが、よく目をこらし、住んでいる人に話を聞いてみると、思わず笑ってしまうような珍エピソードが溢れていた。この映画は、そんな真鶴町で実際に起こったできごとや、町にある景色を素材にフィクションとして描き起こした、真鶴シティサイクリングファンタジーである。

監督＝吉開菜央 出演＝前田エマ 撮影＝幸前達之 美術＝加藤小雪
照明＝加藤大輝 プロデューサー＝鈴木徳至 協力＝真鶴町
平成28年度 メディア芸術クリエイター育成支援事業

吉開菜央

みずのきれいな湖に

2017 / 9 min

16



わたしたちは、水に生かされもすればきっと殺されもする。
姿形を変えながら、地球を縦横無尽に巡る水に、いつかわたしも取り込まれる日がくるだろう。雨の降り止まない湖のほとりで、水や、その周りにある空気に身をゆだねて舞うからだを捉えた、ダンス・フィルム。

監督＝吉開菜央 出演＝小暮香帆 撮影＝黒田菜月／伊藤公一／上田晴久
録音＝jiji タイトルデザイン＝畑ユリエ 音楽＝松本一哉

荒木 悠

利未記異聞 | WRONG REVISION

2016 / 15 min



瀬戸内海沿岸や九州地方に古くから伝わる風習・干し蛸の背後にはキリスト教伝来が深く関わっていたことを仄めかす映像作品。芥川龍之介の短篇小説『煙草と悪魔』（1916年）を原作に添え、その内容を大幅に改訳。岡山芸術交流で発表した本作は、5つの部屋を使ったインスタレーションとして発表した。

製作 = 岡山芸術交流実行委員会 収蔵 = 石川文化振興財団

飯岡幸子

ヒノサト

2002 / 43 min



祖父が一人で手作りし、一度だけ回してその音を確認め出征したという古い蓄音機の物語をきっかけに、監督は画家であった祖父の残した絵を辿って日の里の町を歩き始める。静かに映し出される町の風景。絵。そして挿入される小さな文字。画家のアトリエに光が射し込む時、流れる三つの時間間にわかに接近する。

監督・編集 = 飯岡幸子 撮影 = 飯岡幸子 / 北野奈央 録音 = 河野 恵 整音 = 白井 勝

青柳菜摘

家の友のための暦物語

2018 / 29 min



『ライン地方の家の友』（J.P. ヘーベル、1808）と、『暦物語』（B. プレヒト、1949）の、2つの「暦物語」を受けて制作している作品です。これらはその名の通り、物語を暦に付随させることで庶民へ普及させたものです。物語の何篇かは「家の友」や、偏屈な爺さんである「コイナーさん（Keuner）」といった人物が、時代を俯瞰して庶民や情景を観察するように登場しています。今回の映像では14篇の物語を書き、物語のタイトル末尾に背景を持つ年代を付けています。現在も制作を継続しながら、本という形では普及させず、朗読され、風景と共なる映像として、現代の暦物語を立ち表せます。

出演 = 玄宇民 / カニエ・ナハ / 堂端 徹 協力 = 和田信太郎

玄 宇民

逃島記（トウトウキ）

2019 / 12 min



香港の離島、韓国の済州島をめぐる新プロジェクト第一弾。今作は中国本土からの「逃港」という移民の歴史をもつ香港を舞台の中心に据えつつ、作者自身の祖母の遺骨を韓国の済州島に運ぶ様子などを織り交ぜる。異なる場所の物語を「イマジナリーライン」という切り口から新たに語る試み。進行中のプロジェクトの為、編集は本上映に合わせた2019年2月版。

撮影・編集 = 玄宇民 通訳 = Maynee Lee ナレーション = 足立智充
助成 = アーツコミッション・ヨコハマ

RAM2 Trainees



新井麻弓 | あらい・まゆみ

美術家。1988年ニューヨーク生まれ。2013-15年、ウィーン応用芸術大学写真専攻にて学んだ後、2016年、東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。現在、同大学博士後期課程在籍。トランスフォーメーションは、最も原始的で驚異的な創造行為であると考え、他の芸術家のみならず様々な土地の人々と共に、私たちを取り巻くしがらみや幻影なども含め、ある種の「ごっこ」の要素にして遊ぶ。近年の主な活動に、個展 2017年「All the space and time left behind me」(Central Saint Martins, ロンドン)、「Nothing happened. It's already happened」(遊工房アーツスペース、東京)、グループ展 2018年「my grammar and (y)ours?」(OnCurating Project Space, チューリッヒ)、「森人 - Taruko Arts Residency Project (&II)」(TheCube Project Space, 台北)、「It's just about we」(Ausstellungsraum Klingental, バーゼル)など。



エルサムニ・ソフィー | Sophi Elsamni

2018-19' イメージフォーラム研究所研究生、映像製作スタッフ。沖縄生まれ。10代後半より、父の故郷であるエジプト・カイロをベースに生活。カイロアメリカン大学政治学部国際関係学卒業。ロンドン大学東洋アフリカ研究院中東地域学(メディア・政治)修士課程修了。映画・映像作品を通して対象地域の社会・政治情勢を分析する手法を軸に、アラブ諸国・中東地域研究を進める。映像作品を通じた、自己についての語り方、ナレーションや語り、議論の場の生成などに関心がある。



川上伸太郎 | かわかみ・しんたろう

精神科医。東京生まれ。旭川医科大学医学部医学科卒業。現在、都内の公立精神科病院に勤務。都市や建築を人間として見立て、ありのままを調査・記述し、解釈や判断を避ける現象学的アプローチを得意とする。精神医学や精神病理学をベースに、時間・空間・人間の配置図を偶発的に書き換える試みを行う。



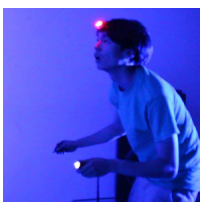
木村奈緒 | きむら・なお

フリーランス。1988年生まれ。2010年上智大学文学部新聞学科卒業。メーカー勤務などを経て、現在は美学校と認定NPO法人水俣フォーラムでスタッフを務めながら個人で取材・企画などを行う。2015年に東京で『わたしたちのJR福知山線脱線事故—事故から10年展』を開催。自分の中で見過ごせないもの、やり過ごせないことを何らかの形にしているように思います。https://kimuranao.tumblr.com/



小宮麻吏奈 | こみや・まりな

アーティスト / アーター。1992年アトランタ出身、東京在住。「人類における新しい生殖の可能性」を自身の身体を起点とした複数のメディアを通して模索している。これまでの主なプロジェクトに、「小宮花店」という花屋の経営や「野方の空白」というスペースの運営など。現在は都内の更地にて家のない「庭」を作るプロジェクトを始動。



小山 渉 | こやま・わたる

アーティスト。1992年東京都生まれ。2016年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。主な展示に、「作品を「飾る」#1 - 相模原 Super Open Studio-」(相原スタジオ、東京、2018)、「Escape」(Art Center Ongoing、東京、2018)がある。作品制作のテーマは「人が作り出す幻(幽霊)」について、主に映像作品を制作する。制作に度々幽霊という言葉を用いるが、その言葉の位置づけは社会や個人にとってのある中間性として考えている。

RAM2 Fellows



青柳葉摘 | あおやぎ・なつみ

アーティスト。1990年東京都生まれ。ある虫や身近な人、植物、景観に至るまであらゆるものの成長過程を観察する上で、記録メディアや固有の媒体に捉われずにいかに表現することが可能か。リサーチやフィールドワークを重ねながら、作者である自身の見ているものがそのまま表れているように経験させる手段と、観者がその不可能性に気づくことを主題として取り組んでいる。2014年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。メディアプロダクションチームであるコ本や honkbooks 主宰。「だつお」というアーティスト名でも活動。



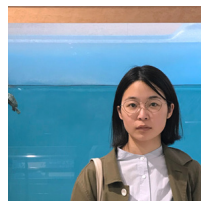
飯岡幸子 | いいおか・ゆきこ

映画美術学校ドキュメンタリーコースにて佐藤 真氏に師事、映像制作を始める。監督作に《オイディプス王／ク・ナウカ》(2000)、『ヒノサト』(2002)。撮影スタッフとして参加した作品に、安井豊作監督《Rocks off》(2011)、酒井 耕 / 濱口竜介監督《うたうひと》(2013)、杉田協士監督《ひかりの歌》等。昨年 kanzan Gallery にて初の個展《永い風景》(企画 / 協力: コ本や honkbooks)を開催。



玄 宇民 | げん・うみん

映像作家・アーティスト。1985年東京生まれ。生まれた地を離れた人々のありようと移動の記憶、マイグレーションをテーマに韓国と日本で映像作品を制作。主な作品は韓国系移民の若者をインタビューした《NO PLACE LIKE HOMELAND》(2011)、韓国の実在するフェリーを舞台にしたロードムービー《OHAMANA》(2015)、戦前の日本に暮らした韓国人女性飛行士の足取りを俳優と共にたどる《未完の旅路への旅》(2017)など。2016年以降ソウル独立映画祭(韓国)、Taiwan International Video Art Exhibition(台湾)、ディアスポラ映画祭(韓国)で作品上映。東京大学文学部美学芸術学専修卒業。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士過程、同博士後期課程修了。https://bit.ly/2S6y805



佐藤朋子 | さとう・ともこ

アーティスト。1990年長野県生まれ、横浜在住。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。映像メディアを用いてパフォーマンスを行う。2018年にレクチャーパフォーマンス《しろきつねプロジェクト vol.1, "隠された歌"》(BankART Studio NYK, 横浜)を発表。狐と人間の伝説である説経節『信太妻』を底本としたオペラ『The White Fox』(岡倉覚三〔天心〕作、未完)にもう一つの戯曲があった設定をつくり、日本につたわる「狐につままれた話」をめぐる作品を発表した。2019年には《103 系統のケンタウロス》(Gallery Saitou Fine Arts, 黄金町)を発表。

GUEST ARTISTS



荒木 悠 | あらい・ゆう

美術家・映像作家。1985 年生まれ。2010 年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士課程修了。2017-8 年光州の国立アジア文化殿堂およびアムステルダムのライクスアカデミーにゲスト・レジデントとして滞在。近年の主な展覧会に国立国際美術館、岡山芸術交流 2016、ジョアン・ミロ財団現代美術研究センター、ダラス・コンテンポラリーなど。2018 年には《利未記異聞》と共同監督を務めた《Mountain Plain Mountain》の二作品が第 47 回ロッテルダム国際映画祭に正式招待され、後者はタイガー・アワードを受賞。2019 年、第 5 回フューチャー・ジェネレーション・アートプライズのファイナリストに選出される。



伊阪 柊 | いさか・しゅう

映像作家。1990 年奈良県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士課程在籍。映像による環境科学と感覚認識を横断するアナロジーの作出を行う。環境の動態を捉える上での映像に必要なアクターを、対象となる固有の環境に介入することで作り出し、それらが映像制作空間の中で立ち振る舞う様子そのものをドキュメントする。いわば環境の動態表象としてのフィクションが生成される過程を追跡するドキュメンタリー映像の制作を目指す。近年は環太平洋造山帯というハイパーオブジェクトに対するアプローチの探求を継続している。その一環として、口永良部島の動態をドキュメンタリー制作を通して追跡している。



オル太 | OLTA

アーティスト・コレクティブ。井上 徹、川村和秀、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi の 6 名からなる表現集団。2009 年に結成し、日常の身振りから伝承されていく形式的な作法を取り入れ、土地に根づく集合的な記憶や人間の根源的な欲求に迫るインスタレーションやパフォーマンスを展開する。第 14 回岡本太郎賞受賞。これまで参加した主な展覧会に「内臓感覚 - 速くて近いきこり」(金沢 21 世紀美術館)や「死の劇場 - カントルへのオマージュ」(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)、「Hybridizing Earth, Discussing Multitude」(釜山ビエンナーレ 2016) など。



黒田大祐 | くろだ・だいすけ

美術家。1982 年、京都府福知山市生まれ。2013 年、広島市立大学大学院芸術学研究科総合造形芸術専攻（彫刻領域）修了。橋本平八「石に就て」の研究で博士号取得。広島在住。チームやめよう主宰。地形や気象などの物理的な環境と人間の作り出す歴史や物語の関係性について作品を制作している。近年は「不在の彫刻史」と題し、彫刻にまつわる物語について調査し作品を制作している。主な展覧会に、「ハイパーゴースト・スカルプチャー」(kanzan Gallery, アーツ千代田 3331, 2018)、「対馬アートファンタジア」(長崎、対馬。2011 年より毎年参加)、「不在の彫刻史」(トーキョーアーツアンドスペース本郷, 2016)、「ヨコハマトリエナーレ連携企画 BankART Life4 - 東アジアの夢 -」(BankART Studio NYK, 2014) 等がある。



佐藤未来 | さとう・みく

アーティスト。1985 年神奈川県生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。現在、東京藝術大学大学院映像研究科在籍。土地へのフィールドワークをベースに、そこに住む人々を起用してプロジェクトを立ち上げていく。映像、インスタレーション、パフォーマンス、ワークショップなどの様々なメディアを用い、歴史や文化の多様性・国家と個人の関係について再考しながら作品を展開する私たちの関心を再検討し、現在のグローバリズム社会における個人の多様性や社会の別の可能性と、そこに浮かび上がる問題を探索する。



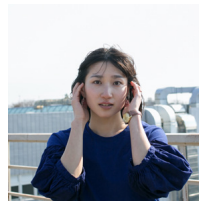
潘 逸舟 | はん・いしゅう

アーティスト。1987 年上海生まれ東京在住。グループ展に「In the Wake - Japanese Photographers Respond to 3/11」(ポストン美術館, 米国, 2015)、「Sights and Sounds: Highlights」(ジューイッシュミュージアム, NY, 米国, 2016)、「この現実のむこうに」(国際芸術センター青森, 2017)、個展に「私たちの条件」(URANO, 2017)、「The Drifting Thinker」(上海 MoCA パビリオン, 2016) などがある。



百瀬文 | ももせ・あや

アーティスト。1988 年東京生まれ、東京在住。パフォーマンスを記録するための方法として映像を用い始め、身体と声、映像と声の関係性を問うような作品を発表している。近年の主な個展に「Borrowing the Other Eye」(ESPACE DIAPHANES, 2018)、「サンプルボイス」(横浜美術館アートギャラリー 1, 2014)、主なグループ展に「六本木クロッシング 2016 展: 僕の身体、あなたの声」(森美術館, 2016)、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(国立新美術館, 韓国国立現代美術館, 2015-16) などがある。ACC の助成を受け、2017 年 NY に半年間滞在。



吉開菜央 | よしがい・なお

映像作家・ダンサー。1987 年山口県生まれ。日本女子体育大学舞踊学専攻卒業、東京藝術大学大学院映像研究科修了。生き物ならではの身体的な感覚・現象を素材に、「見て、聴く」ことに集中する時間を映画にする。2015 年に監督した《ほったまらびより》が第 19 回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門新人賞を受賞。近年の主な作品は《風にのるはなし》、《静坐社》、《みずのきれいな湖に》。いずれも国内外の映画祭や展覧会で上映されている。2019 年 3 月 10 日まで「オープン・スペース 2018 イン・トランジション」(NTT インターコミュニケーションセンター [ICC], 東京) にて触覚映画《Grand Bouquet / いま いちばん美しいあなたたちへ》(2018) を出展中。

geidaiRAM2 とは

東京藝術大学大学院映像研究科が主催する「メディアプロジェクトを構想する映像ドキュメンタリスト育成事業」。芸術の社会的な役割が問われているなかで、同時代芸術としての新たな問いを発見し、それをいかにして表現するためのプロジェクトとして実践していくか。その問いに対して、geidaiRAM2 はアクチュアルな芸術実践の場を創出する機会を提供するプロジェクトです。従来のドキュメンタリーという表現のあり方を拡張させて、メタフィクションを前提とするポストドキュメンタリーの視点から、メディアプロジェクト（映像作品やインスタレーション作品など）としての表現形式を構想する映像ドキュメンタリストの育成を図っています。